

ムーアのパラドクス未来形バージョンと信念の変化

川口 嘉奈子

1 ムーアのパラドクスとオースティンの「発話の前提」

ある形式の信念の発話に現れるムーアのパラドクスは、何らかの意味での首尾一貫性に関するパラドクスである。その一般的な形式は

- (1) 「P であるが、しかし私は P であることを信じない。」
("P, but I don't believe that P.")

である¹。この文における第一連言肢と第二連言肢は、一連の発話の中にあるにもかかわらず、少なくともある意味で一貫性を持たない。このような一貫性の欠如は、日常会話で使われる表現として不適切であるように思われる。しかしながら、例えば次のような数種類の書き換えを行うことにより、この文の首尾一貫性に関するパラドクスを消去することができる。

- (2) 「P であるが、私は P であるとは信じていなかった。」(過去時制化)
(3) 「P であるが、彼は P であるとは信じない。」(第三人称化)
(4) 「P であるが、私は P であるとは信じない、としよう。」(条件節化)

書き換えられた文を見ると明らかのように、ムーアのパラドクスが現れる文(以下、ムーア文)の内容そのものが首尾一貫性を欠いているのではない。つまり、文それ自体の内容にはパラドクスの原因がないことになる。では、文の内容以外でパラドクスの原因となるものは何か。この問いに対する一つのアプローチとして、オースティンによる発話の前提²を用いたムーア文の分析を挙げることができる。

オースティンの前提によると、発話が冗談や嘘、あるいは台詞などである場合を除き、ある発話者による命題 P の発話は、その発話者が P の内容を信じていることを「含意(imply)」³している。すなわち、

(5) 発話者 a が「P である」と発話したならば、a は P であると信じている

となる。そして、ムーア文においてこの前提を明示化すると以下ようになる。

(5) と、(1) の発話の第一連言肢

(6) 「P である」

から、(1) の発話者を a として

(7) a は P を信じている

が引き出される。一方、

(8) 「私は P であることを信じない」

からは、発話者が a であるということにより、発話が冗談や嘘、台詞などである場合を除き、

(9) a は P と信じていない

が引き出される。(1) は一続きの発話であるので、(7)、(9) より、

(10) a は P と信じていて、a は P と信じていない

が導出される。a が P と信じていることを「BaP」と表記するならば、(10) の文の形式は BaP&-BaP となり矛盾式の形をとる⁴。前提を明示化する作業によっ

て、ムーア文は単なる音声としての発話は可能でも（明示化された前提を含めて）一貫した内容を持つことはできないことが導かれる。このように、オースティンの前提を与えると全体として論理矛盾に陥る、という側面がムーア文をパラドクシカルに見せる原因である。

さて、上述の通りムーアのパラドクスの原因を明らかにした今、本題である未来形のムーア文に立ち入ることにしよう。

2 未来形のムーア文の不自然さ

第1節でムーア文の書き換えに言及した際、ムーア文は別の時制や人称の文へと書き換えることによってパラドクスを回避できると述べた。では、他の書き換えと同様、未来形への書き換えはパラドクスの回避につながるだろうか。

(1) を未来時制に書き換えると次のようになる。

(11) 「Pであるが、私はPであるとは信じないだろう。」

("P,but I won't believe that P.")

パラドクスを明確に除去することとなった過去時制や第三人称への書き換えとは異なり、この(11)には、依然として不自然でパラドクシカルな感じが残るように思われる。ここで現在時制の場合と同じく、(11)についてもオースティンの前提を明示化してみよう。すると、(発話者をaとして)「aはPと信じているが、aはPと信じないだろう」となり、論理矛盾が起こらない⁵。このことから、未来形のムーア文には直説法一人称現在時制のムーア文のそれとは性格が異なった不自然さがあることがわかる。そして、(11)が少なくとも未来の信念変化⁶とかかわっていることが見てとれる。

今「地球の表面の70%は海で覆われている」とある人が信じているとしよう。そして、地球の温暖化が進む等の理由で、仮に50年後には地球の表面の80%が海で覆われているとする。すると、50年後に地球の表面に関する情報を得た場合、その時その人は「地球の表面の80%は海で覆われている」という信念を持つことになるだろう。このような場合、その人には信念変化が起こっている。

自然に対する観測が進むことによって、科学的データの蓄積による信念変化(拡張)は起り続けるであろう。この例のような典型的な信念拡張は、信念変化の一種であるにもかかわらず、当然ながらパラドクシカルではない。

ところが(11)の場合は事情が異なる。なぜなら(11)の中では、文を発話している現在と、その文の内容を信じなくなる未来が同時に想定されているからである。つまり、(11)は発話者の信念の縮小が前提になっている発話ということになる。この発話はとても奇妙である。というのは、ある信念が確実に変化するとわかっているならば、そこからは、今持っているその信念がそもそも誤りであることもわかっているということが帰結するように見えるからである⁷。すると(11)の第一連言肢は根拠のない信念の発話であり、第二連言肢が正しい信念を述べていることになるのだろうか。

以上の考察から一つの問題が示唆された。一連の発話の中で確実な信念変化が想定されている形式の文に、パラドクスに陥る特殊な原因が隠されていることがあるのではないかという疑問である。これをふまえ、次節では、未来の信念変化を予測したあるタイプの発話を例文として取り上げて考察する。

3 信念の根拠とユリシーズの発話

『オデュッセイア』において、セイレーンは歌声に魔力を持つ魔物であり、その歌を聴いた人間は必ず海に飛び込んでしまう。セイレーンの歌を聴きたいと思っていたユリシーズが、セイレーンの住む海域を航海する際⁸に次のような発言をするとしよう。

(12)「私は海に飛び込むべきであると信じるようになるだろうが、海に飛び込むべきではない。」⁹

(12)には信念を含む一連の命題的態度の変化が現れている。「海に飛び込むべき¹⁰ではない」をPとして未来形のムーア文に代入してみると、ヒンティッカ型(P&F(-BaP)型)とヴィトゲンシュタイン型(P&F(Ba-P)型)はそれぞれ

れ、

(13) 「海に飛び込むべきではないが、私は海に飛び込むべきではないとは信じないだろう。」

(14) 「海に飛び込むべきではないが、私は海に飛び込むべきであると信じるだろう。」

となり、(14) は (12) と同値であるため、まさに (12) はヴィトゲンシュタイン型のムーア文の未来形バージョンであることがわかる ((11) はヒンティツカ型であった)。ユリシーズがセイレーンの歌を聴いた後でも信念に関して合理的であるとすれば、上記の (13) は (14) によって含意される (註4 参照)。

信念を持つための証拠や根拠という別の観点から、未来形のムーア文を考察してみよう。a が未来に P と信じるようになるだろうという主張は、P という信念を持つための証拠に a が現在のところアクセスできていないという状態を示す。それは次の発話

(15) 「このニュースを見れば、いくらオカルト好きとはいえ、彼女もあれを人間の仕業だと信じるようになるだろう。」

において明確である。そして「彼女」を「私」に置き換えることにより、(15) は非常にパラドキシカルな発話になる。それは、自分が未来に人間の仕業であると信じるようになるための証拠=ニュースが、人間の仕業であることを今信じないでいる、ということをも不可能にさせるような性格を持つものだからである¹⁰。(15) を未来形のムーア文の形に明示的に書き換えるとするならば、

(16) 「あれは人間の仕業ではないが、このニュースによって私も人間の仕業であると信じるようになるだろう。」

となり、第一連言肢と第二連言肢の内容の間に、新しい証拠を得ることによる

信念変化が想定されているということが出来る。しかし、未来に信念変化が起こることを前提としつつ、自分の現在の信念を述べるこの発話は奇妙である。未来にPと信じるのが今わかっているならば、なぜ今Pを信じていないのか、ということになるからである。

しかしながら(12)については事情が異なる。未来に自分の信念が変わると考える根拠と、今自分が持っている信念に対する根拠とが互いに独立しているのである¹¹。自分が海に飛び込むべきであると信じるようになるとユリシーズが考えるのは、セイレーンの魔力の効果を知っているからである。一方、海に飛び込むべきでないと考えているのは、海に飛び込むと必ず死んでしまうと予想されるから(そしてもちろんセイレーンの歌声を聴くために死ぬのは嫌だから)である。以上の考察からわかるように、文が同じ形式を持っているにもかかわらず(12)と(16)の発話は大きく異なっている。(16)のタイプこそが、未来形ムーア文に特有のパラドクスの要素を持った発話である。(12)に関しては、(16)のように新旧の信念の根拠が衝突していないという理由から、今のところ筋が通った発話であるように見える。

4 魔法にかかった人に信念変化は起こるか

第3節で典型的な未来形ムーア文との差異が明らかとなった(12)のケース(以下、ユリシーズ文)を取り扱うために、私は次のようなアプローチを提案したい。それは、魔法にかかったユリシーズは、通常の仕方では信念が帰属できる状態ではなく、その状態での「海に飛び込むべきだ」という発言には意味がないかもしれないというものである。そこにたどり着くにはいくつかのステップを踏まねばならない。

まず、欲求と判断の関係である。一般に「AとBを両方したいけれど、Bをすべきである」というとき、AとBは両立不可能である。例えば「歌も聴きたいが命も惜しいので、海に飛び込むべきでない」ならば、命よりも歌を聴くことの方が優先順位が低いと判断されている。次に行動と信念および欲求の関係である。一般に、もしあることを意図的に実行したならば、それをしたいと思っていたしそのようにすべきであると判断していた、とする解釈が存在する。「海

に飛び込むべきだ」と口にしていたとしても、意図的に飛び込まないようにしていたとしたら、それは飛び込みたくないし飛び込むべきでないと思っていることになる。一方、海に飛び込むべきだと思いつつも、その意図に反して飛び込めなかったケース（飛び込んだけれども、船の縁に衣服が引っかかって海に落ちないようなケース）も考えられるが、その場合は、海に飛び込むべきでないという信念や、海に飛び込みたくないという欲求を帰属させることは当然できない。

これらの関係を前提として考えたとき、以下のことがわかる。実際に、海に飛び込まずに歌を聴くことができるならばユリシーズはそうするであろう（彼はまさしくそのために自分をマストに縛った）。ということは、(12)を発言するユリシーズの信念は一貫して「海に飛び込みたくない」であると考えることができる。魔法にかかった後に彼が「海に飛び込むべきである」と発言してしまうのは、信念は一貫しているにもかかわらず、そう信じるための証拠を見失うからであると考えられる。そしてその証拠を見失う原因こそが、ユリシーズ文の奇妙さの原因になる。

信念の根拠を見失うということはどのようなことか。第3節で述べたように、(12)の発話においては、未来に自分の信念が変わると考える根拠と、今自分が持っている信念に対する根拠とが互いに独立している。ユリシーズは、歌を聴くために海に飛び込むと死んでしまうが、それは嫌なので海に飛び込むべきではないと考えており、また、セイレーンの歌を聴けばその魔力によって海に飛び込むべきだと信じるようになると確信している。前段落の議論によって、ユリシーズは歌を聴くために海に飛び込むべきではないと信じ続けていることになるが、セイレーンの歌声がユリシーズの耳に入った時、ユリシーズは魔法にかかる。そして、魔法にかかったことにより何を信じていたかがはっきりしなくなる。このように、ある種の思考妨害によって信念の根拠が見失われる。

魔法の他に、信念の根拠を見失わせるものがどのようなものかを考えよう。すぐに考えつくものとしては、アルコールや薬物による酩酊状態や、アルツハイマー等の疾患、洗脳や催眠術といった正常な思考を妨害する行為がある。例えば大変腕が良いと評判の催眠術師が今まさに目の前にいて、五分後に催眠術をかけると言い出したとする。彼の催眠術は今信じている内容の否定を信じさ

せるものであり、「宇宙人が存在する」という私の考えは、五分経てば「宇宙人は存在しない」になると予測される。この催眠術師の登場は一見、確実に信念変化が起こる根拠になり得そうだが、私は次の考えによってそれを否定したい。

それは、もし催眠術が成功したとしても信念主体は「宇宙人はいる」と信じているという解釈である。催眠術等は信念変化を引き起こしているのではなく、信念主体の判断能力や思考能力を一時的に上下させるものでしかない。このように考えると、判断能力が低下したために自分の信念の根拠を見失った信念主体は、自分の信念から外れたことを発言するようになる。こうして、ユリシーズが「海に飛び込むべきではない」と考えていたにもかかわらず、セイレーンの歌によって「海に飛び込むべきだ」と発話してしまうことは想像に難くない。

5 記憶喪失と魔法の違い

(12) の発話についてまとめると以下ようになる。

セイレーンの魔法の効果を予測したユリシーズが(12)を発言する。その発言の奇妙さは、オリジナルのムーア文や、未来形ムーア文のパラドクシカルな感じの原因とは異なると予想された。第4節においては、判断、行動、信念、欲求に関するある一般的な見解を用いて新たな方向からのアプローチを試みた。これにより、(12)を発話するユリシーズに信念変化は起こっておらず、彼は「海に飛び込むべきではない」と信じ続けるとも考えられることがわかった。ところが、セイレーンの歌によって著しく判断能力が低下したユリシーズは、自分が「海に飛び込むべきではない」と考えていたことを忘れて(12)を発言することになる。以上のことから、信念変化ではなく、正常な思考を妨げる出来事によって、あることを信じ続けるための証拠を見失うことがユリシーズ文のパラドクスの原因であることが結論付けられる。(12)で予言されるユリシーズのような心神喪失状態の人間には、「ユリシーズは海に飛び込むべきであると信じている」という信念帰属はままならないため、(12)の発言は奇妙なのである¹⁰。

パラドクシカルな感じの由来は明らかになったが、ユリシーズの信念帰属という点を(12)で再び考えたい。前段落では心神喪失状態の人間には信念帰属

がままならないと述べたが、第4節において、ユリシーズは一貫して「海に飛び込むべきではない」と信じ続けていることになっていた。つまり、心神喪失状態にあるユリシーズにも「海に飛び込むべきでない」という信念が帰属しているように見えるのである。この信念の帰属の仕方は少し変わっていて、帰属の時点での信念主体の内面を完全に無視した形で行われている。それは、信念主体が心神喪失状態になっているために、帰属するはずの新しい信念が誤りであるとして適合せず、信念主体に適切な信念として古い信念がそのまま継続して読み込まれる状態を表している。ここでは正気でない人に信念は帰属しないと言いつつも、そのような信念主体がどのように思っていたところで何らかの信念が（しかも心神喪失していない状態の信念があればそれが）あらゆる発話に帰属させられることが示されている。

しかし次の例を考えた時、完全に正気の状態と心神喪失状態との間に、曖昧な信念帰属の段階を想定することができる。

- (17) 「彼女はほんとうは植物を愛しているのだが、記憶喪失になってから植物を憎むべき悪魔だと言うようになった。」

この(17)には二つの解釈を考えることができる。まず一つめは、文中の「ほんとうは」を字義通りに解釈する読み方である。そうした場合、この文はユリシーズ文と同じように解釈され、記憶喪失になった後にも「記憶喪失以前の正常な状態」の信念がそのまま帰属させられることになる。もう一つは、信念主体が以前「ほんとうに」植物を愛していたが、記憶喪失後の信念改訂によって今は植物を憎むべき悪魔だと思っている、とする読み方である。この二つはどちらも可能な解釈に見える。しかしながらこれら二つの解釈を同時に行うことは、信念主体を非合理的にし、適切ではない¹¹。(17)の例は、記憶喪失のケースが本稿のユリシーズ文に対する解釈の適用の境界であることを示しているように思われる。

6 結語

オリジナルのムーア文、未来形ムーア文、ユリシーズ文の「パラドクス」の原因はそれぞれ異なっていることがわかった。ユリシーズ文に関して言えば、あることを信じ続けるための証拠を見失うような判断能力の低下がパラドクスカルな感じの原因の一部となっている。それは、ムーア文や単なるその未来形バージョンの文を発話することの不適切さとは異なり、発話主体の信念や信念の根拠の整合性については問題がないことを示唆している。

註

- ¹ ムーアのパラドクスは、第一人称単数形、直説法、現在時制、能動態の発話文に現れる。また、「ムーアのパラドクス」と一括りにされているが、実はムーアのパラドクスが現れる文には二種類ある。一つはこの論文でもオリジナル型として用いている (1) の文であり、もう一つは
 (18) 「Pであるが、しかし私はPではないと信じている。」
 ("P, and I believe that not-P.")
 という形式の文である。Bovens(1995)に倣い、(1)の形式を「ヒンティッカ型ムーアのパラドクス(Hintikka's Moore's Paradox)」、(18)の形式を「ヴィトゲンシュタイン型ムーアのパラドクス(Wittgenstein's Moore's Paradox)」と呼ぶことにする。実際、「Ethics」においてムーアはこれら二つの差異を明確にしておらず、ヴィトゲンシュタインが "Philosophische Untersuchungen"(1958,pp.190-)でムーアのパラドクスに言及した際はもっぱら後者のものについてであった。
- ² Austin(1962)の第四講(邦訳 pp.67-92)参照。オースティンの言う発話の前提は、通常の発話において主張すること(assertion)は信じること(belief)を含意するというものである。彼によると、信じていないことを主張することは不誠実(insincerity)であり、不適切な発言に分類される。また、連言発言の場合に、前の文が次の文の矛盾を帰結するような発言は不可能である。以上のことからムーア文は発話不可能な文ということになる。
- ³ 「含意する(imply)」という語の性格は、もともとはムーアが「Ethics」(1912,pp.125)で指摘したものである。いくつかの例が挙げられているが、例えば、「先週の火曜に映画に行った」と発話者が主張する場合に、たとえ主張しなくても、発話者がそのように行動したということを発話者自身知っている、もしくは信じているという意味で用いられる「含意」が最もポピュラーな「含意」の使用である。ムーアの「含意」に関する問題を論じたものとして、Black(1952)等がある。
- ⁴ 特筆すべきは、オースティンの前提を明示化した場合にヒンティッカ型とヴィトゲン

シュタイン型の違いを無視できないことである。後者の型のパラドクスの場合には、発話者であり信念主体でもある a が、P と P という相反する二つの信念を同時に持つことになり、a に論理的整合性がないことになる。ところが、オースティンの前提を明示化せずに、ヴィトゲンシュタイン型ムア文の発話者が合理的であると仮定すると、次のような興味深い結果にたどり着く。すなわち、

- | | | |
|------|---------|--------------------|
| 前提 1 | P&BaP | (ヴィトゲンシュタイン型ムア文) |
| 前提 2 | BaP→BaP | (信念主体の合理性) |
| ① | BaP→BaP | (前提 2 の P に P を代入) |
| ② | BaP | (前提 1×縮小律) |
| ③ | BaP | (①と②×モードウス・ポネンス) |
| ④ | P | (前提 1×縮小律) |
| ⑤ | P&BaP | (④と③×付加律) |

となり、ヴィトゲンシュタイン型ムア文の発話者が合理的であるならば、その文はヒンティッカ型のムア文を含意するのである。

⁵ オースティンの前提をムア文の未来時制バージョンに適用すると、それぞれ
ヒンティッカ型・・・BaP&F(BaP)

ヴィトゲンシュタイン型・・・BaP&F(BaP)

となる（「F」は未来時制を表す）。現在時制のムア文とは異なり、第二連言肢が未来の信念についてのものであるために、確かに矛盾式にはならない。

⁶ 信念変化は次の三種類のものの総称である。

拡張・・・BaP から BaP への変化

縮小・・・BaP から BaP への変化

改訂・・・BaP から BaQ への変化

この論文中で私はこれらを区別しておらず、「信念変化」という語で三つのうちのいずれかを表現している。

⁷ この論点については Foley(1994, pp.754ff.)を参照。

⁸ Foley(1994, pp.747-748)に、一つの例としてこのユリシーズとセイレーンの話が取り上げられている。『オデュッセイア』のもともとのあらすじは以下ようになっており、未来の信念変化を予測したユリシーズの行動が描かれている。この論文ではあらすじの状況に基づき、ユリシーズの発話とその周辺の議論を構成した。「セイレーンの歌声には魔力があり、ひとたびその歌を聴いてしまうと最後まで聴かずにはいられなくなる。ところが、セイレーンは急流の中心にある海の孤島に住んでおり、最後まで聴くためには乗っている船から飛び下りなければならないが、海に飛び込んだ場合は急流に飲まれて溺死してしまう。ユリシーズはセイレーンの歌を聴いてみたいと思っている。そこで彼の一行がセイレーンの島に近づいたとき、セイレーンに関する事実とユリシーズの願望を知るキルケーは次のような助言をする。船員達には歌が聞こえないように耳に蜜蝋を詰めること。ユリシーズには歌を聴いても海に落ちないようにマストに体を縛り付けること。このようにして一行は、歌を聴きつつも無事に航海を続ける

ことができた。」このユリシーズとセイレーンの話をもとに、未来に何かを信じることを問題にした議論が Jon Elster, *Ulysses and the Sirens*(Cambridge University Press,1979) や Fraassen(1995)にもある。

- ⁹ この文が述べているのは予測された未来の出来事についてであり、仮定の話ではない。したがって、第一連言肢を「ユリシーズが魔法にかかるならば」という条件節が省略されているものと読むべきではない。
- ¹⁰ このような見解は、例えば、正常な状態の時に遺言状を作った老人が、痴呆の症状が出た後に突然その内容を撤回したいと言い出したような場合に、その老人の発言を無視すべきであるといった主張に哲学的な根拠を与えることになるだろう。
- ¹¹ ここでは信念は合理的な信念主体だけに帰属できると考えている。なぜなら、非合理的な信念が何かに帰属できるならば、ムーア文のパラドクスという本稿の問題からとうに解放されているはずだからである。

文献

Austin,J.L., *How to Do Things with Words*, Harvard University Press., 1962.

坂本百大訳 『言語と行為』 大修館書店 1978 年

Bovens,L., "'P and I Will Believe that not-P.':Diachronic Constraints on Rational Belief," *Analysis*, vol.13, 1995, pp.25-33.

Elster,J., *Ulysses and the Sirens*, Cambridge University Press, 1979.

Foley,R., "How Should Future Opinion Affect Current Opinion?," *Philosophy and Phenomenological Research*, vol.54, issue4, 1994, pp.747-766.

Fraassen,B.C.V., "Belief and the Problem of Ulysses and Sirens," *Philosophical Studies* 77, 1995, pp.7-37.

Hintikka,J., *Knowledge and Belief*, Cornell University Press.,1962.

Black,M., "Saying and Disbelieving," *Analysis*, vol.13, 1952, pp.25-33.

Moore,G.E., *Ethics*, London, 1947.

Wittgenstein,L., *Philosophische Untersuchungen*, Cambridge, 1958.

藤本隆志訳 『ヴィトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』 大修館書店 1976 年

(かわぐち かなこ/千葉大学)